壱、開花病

――嗚呼、俺ぁ、何で貴女に恋をしちまったんでしょう。
――貴女には、もう弐度と会えないのに。

僻村に、診療所がある。
僻村の更に辺鄙な所にあるが故、此処には病人しか来ない。――否。病は穢れ。医療を禁じられている今の時代、この診療所は穢れなのだ。
それなのに、何故人々は此処にやってくるのだろうか。
それは、それは――必要だからだ。人間が、生きながらえる為に。
この診療所の主は唐蔵秒（からくらびょう）と云う、真っ黒い髪に真っ黒い瞳、そして真っ黒い着物を着た、まるで悪鬼のような人間である。だが、一度その手を翳せば、病や怪我が治る治癒の異能を持っていた。
それは、この医療が禁じられた時代に於いては忌むべき能力である。故に、家からは勘当され、一人でこの診療所を営んでいるのだ。
ここ暫くは患者も居らず、医術書を読んだり庭の薬草たちとの会話に勤しんだりしている。
――そう、薬草となるものの中、異常植物群の一、舌（たん）は喋るのだ。そして、この庭に居る舌は、大層おしゃべりなのである。
おしゃべりと云えば女性の専売特許、きゃらきゃらと喋る可愛らしい声であれば和むのかも知れぬが、この

庭で長らえている舌はどうも雄株のようで、非常に渋い声で喋るのであった。
とは云え、舌――花が雄株であろうが雌株であろうが、薬草には違いない。おしゃべりでも構わない。この診療所の主はそう云う考え方だ。おしゃべりな彼の姿は宿根草に似ている。
――秒の旦那ァ。
「何ですかぃ」
今日も秒は薬草畑に作った簡易的な椅子に座り、医術書を読んでいた。
――秒の旦那は、別にそう云うの読む必要なんかないんじゃねぇんかい？
花に視覚などあるのだろうか。ないと思うのだが。それなのに一体、何故秒が医術書を読んでいる事が解るのだろうか？　だが、実際この舌とは付き合いが長い。そんな事を気にするような秒ではなかった。
「そりゃあ、治すことはできますが、患部が何処か分かったほうが効率的でしょうに」
それに――と秒は心の中で呟く。
畸型児などは、治せないのだから。
もっと知識を付けて、そうすれば畸型児も治せるようになるかも知れない。
――そう云うもんかぃ。
「そう云うもんでしょうよ」
――そう云やァ、旦那ァ。裏の竹林だけどよぅ。
云われて、薬草畑と地続きになっている竹林を見た。竹の地下茎が薬草畑に来ないように地面にも柵を作るのが常であるが、この竹林は意思を持っているのか、こちらには地下茎を伸ばさない。

――アイツ、最近元気がねぇんだ。
「お前、竹と会話ができるのかい」
――アレ、云ってなかったかい？　あの女ァ、旦那の事を好いているのか、こっちに来たがってねェ。鬱陶しい。
「鬱陶しいとは酷いじゃあねぇですかい」
――旦那も、あの竹がお好きで？
「お前には関係ないよ」
――へいへい。
下世話な舌の言葉に、秒の心は少し弾む。
秒は、竹林の中の清涼感が好きだった。竹の間から差し込む陽の光が好きだった。だから、この場所に診療所を構えたと云ってもいい。
竹が秒に恋焦がれたのではない。秒が竹に恋焦がれているのだ。
棲家から眺めるだけでいい。偶に竹林の中に入って美しさを愛でるだけでいい。そう、思っていたのに。彼の竹も、自分の事を想ってくれているなどと。
秒はすっくと立ち上がり、徐に竹林の中へ足を踏み入れた。
背後で舌が、何か云った気がする。
気のせいだろう。

さわさわと竹の葉が擦れる音がする。
空を見上げると、暖かい日差しが竹の葉を超えて少しだけ降り注ぐ。
秒は一本の竹を撫でる。
すべすべとしたそれは、ひんやりとして気持ちが良い。
上から下まで撫ぜると、その節の凹凸も愛おしい。
此処一帯は、全て彼女だ。地下で繋がっている竹たちは、全て一緒なのだ。
世の中には、筍を食す人が居る。秒もその類の人間ではある。だが、秒にとって竹は愛でる対象でもあるので、それはまるで食人のような感覚になる。勿論、秒の抱く感覚の方がおかしいことは理解している。
「貴女は、本当に美しいですなぁ」
秒が呟くと、何かが聞こえた気がする。

——ありがとう。

「え？」
秒は辺りを見回す。
異常植物群以外が喋る訳がない。
幻聴か。竹を愛しく想いすぎて幻聴が聞こえてしまったのか。
耳を澄ますが、矢張りそれ以上は聞こえなかった。

幻聴であろう。

秒はクスリと笑って、竹林を後にした。

これ以上此処に居たら、迷ってしまいそうだ。竹林は不思議だ。すぐそこに棲家があると云うに、無限に続いているように思える。

ただ、当然そう思えるだけであり、少し歩けば、あのおしゃべりな宿根草（しゅっこんそう）が生える薬草畑が見えてきた。

◇　◇　◇

今年も、筍の季節がやってきた。

秒は竹林に入って、足元を探す。

少しだけ頭を出しているくらいが食べ頃だ。

秒は竹を愛しいと思うが、筍も食として好きだ。その感情は矛盾しているのだろうか？　例えば、鶏が好きな人は鶏肉を食わぬのだろうか？　だが、人を好く人は人を食べない。であれば、この感情は矛盾しているのかも知れない。

だが、まぁそれも個性と云うものなんじゃないか。

秒の弟を始め、秒の知り合いには畸型児を蒐集する人々がいる。秒には理解できないが、それはきっとその人なりの何かがあるのだろう。

そう考えていると、足元に違和感を覚えた。

あぁ、あったあった。筍だ。丁度食べ頃だ。
持参してきたスコップで掘り起こす。あと二、三くらい掘り出したら今日は帰ろう。
本当に、この場所は心地が良い。
ずっとずっとこの場所に居たいと思うが、患者が待っている。

その日の夕食には、採ってきた筍のお浸しを出した。患者たちも旨い旨いと食ってくれたので、心の中で「そうだろう」と呟いた。なぜか竹が褒められたように思える。
例えば、自分の好きな人間の一部を他人が食べて旨いと云われて嬉しいと感じるのは、異常であるとは思う。だが、恐らく秒にとって〝筍が旨い〟は〝貴方の伴侶は器量良しだね〟と云われるのと同じ感覚なのではないかと思う。
そうであれば、異常な感覚ではないだろう。もしかしたら、そうやって自分の感情と感覚を正当化しているのかも知れない。否、そもそも、一番の話し相手が薬草なのだ。自分に正常な感覚などないのかも知れない。
患者が皆寝静まった頃、秒は日課の如く薬草畑から竹林を見ていた。夜はおしゃべりな舌も寝静まっているのか、それとも人間を模倣しているのか、喋りかけて来ることが少ない。月明かりに照らされた竹林を見て、竹から子供が生まれる物語があったなぁ、などと思慮に耽る。確か、竹の一節が金色に輝いていたのだったか。月明かりに照らされていれば、そう見えることもあるのかも知れない。
さわ、さわ、と鳴く竹林を、秒はずっと見ていた。

夜が明けると、秒は診療所の仕事に勤しむ。幾ら治癒の能力を持っていたとて一度の治癒では治らない。それは薬と同じだ。継続して治療に励む必要がある。

大抵は怪我やちょっとした病の患者であるから、数日でいなくなる。何度かやってくる患者もいるので、顔見知りになることもある。だが、あまり喜ばしいことではないので、「怪我や病気には気を付けるんですぜ。此処にはあまり来ないほうが正しいんです」と云って聞かせる。

そもそも、医療が禁じられた今の世、診療所に来ること自体が禁忌である。

日課の如く、病室を回っていると、一人の患者が居なくなっていることに気付く。診療所自体が違法であるので、此処に連れてきた家族とは別の親類が患者を強制的に引き取りに来ることは確かにある。だが、全くの音も気配もしなかった。

「あそこの部屋の患者を知らねぇですかい？」

秒は薬草畑に咲く舌に聞いた。

――知るわきゃあねぇよ、旦那。俺ぁ眼がない。

そう云われて少しムッとするが、それはそれでお門違いだ。いつもこちらを解っている風なのは何故だとか色々聞きたいが、そう云う状況でもない。

「すまん、解った」

それだけ云って、ふと視線を竹林に向ける。

竹林に、魅入られたか。

もしそうであったら、羨ましい、なぜ自分ではないのか――そんな感情がやって来て、不謹慎だと思いつつ

も驚く。自分は嫉妬しているのか。その動揺を隠す為か、一度竹林から目を逸らして、再び向けると、そこには患者が立っていた。意識が朦朧としているようだ。

何があったのだろうか。

秒は駆け寄って、患者の体を支える。

「何故、病室を抜け出したんで？」

すると、患者は答える。「誰かを呼ぶ声がした」それだけを云って、意識を失った。

意識を取り戻した時には、全くそのことを覚えていないようだった。

そんな不思議なことが、何度かあった。

◇　◇　◇

今年も、夏がやってきた。

じわじわと暑い空気と日差しに気が滅入る。

そのような時、秒は決まって竹林の中に避難するのだった。

ここは、涼しい。

最近、何かに取り憑かれたようにこの竹林に足を運んでいるような気がする。

宿根草（しゅっこんそう）のような舌（たん）に「俺ぁ旦那が帰って来なくなるんじゃないかと思っちまったよ」と云われるくらい、

一日中竹林の中に居たこともある。
確かに、最近はおかしいと思う。
自分が、ではなく、この竹林が。
なぜ一日中竹林の中に居るのかと云えば、ただぼうっと其処に佇んでいる訳ではない。この竹林の奥に奥に進むのだ。以前、奥に進むと戻れなくなる感覚を持ったが、実際、この竹林から抜けることが出来ない。この竹林の向こうには、一体何があるのだろうか。
戻れないのは勿論困るので、棲家の見える竹に紐を括り付け、紐を解きながら進む。昨日は持参した紐を全て解き終わっても、棲家の向こう側を見ることが出来なかった。
竹は、棲家の方に伸びて来ない代わりに、棲家の逆の方へとずっと成長しているのかも知れない。
「お前さん、何か望みがあるんで？」
秒は何ともなしに呟くようにそう云ったが、勿論竹から返事が来ることなどない。
竹林は、もっともっと奥に来て欲しそうだった。そんな感覚がした。
だから秒は、明日はもっと長い紐を持って来なければと思った。

――旦那ァ、また竹林に行くんですかい。
舌が心配するような声で云った。勿論、心配などはしていない。舌には感情がなく、ただ条件反射のように音を鳴らしているようなものだ。
「嗚呼、何だか、奥に何かがあるような気がしましてねぇ。今日は夜にも戻って来ないかも知れん。だが、必

ず戻りますぜ」

——俺ぁ、自分が枯れない事だけが心配なんですわ。

秒はクスリと笑う。

「大丈夫ですぜ。薬草を枯らすなんざぁ、俺の自尊心（プライド）が許しちゃくれません」

そう残して、秒は竹林に足を踏み入れる。

いつもは、暗くなる前に棲家に戻れるように空の色を見ながら奥へ進んでいるが、今日はその空の色を見ずに、この紐が尽きるまで、奥に行こう。そう決心している。

今日もジリジリと暑い。だが、竹林の中は幾分か涼しい。

ずっと此処に居たい。この想いは、愛なのだろうか。それとも自分は化かされているのだろうか。否、どうでもいい。化かされているのでも良い。秒は、この竹が、愛しいと感じるのだから。いつものように、紐を解きながら奥へと進む。

右を見ても、左を見ても、前も見ても同じ風景だ。後ろを向いた時だけ、その風景に紐が伸びている。だから、真っ直ぐ、奥へ、奥へ。何も道標がないと、同じ所をぐるぐると回ることがあると云う。だが、秒は紐を解きながら進んでいるので、同じ所を回ることなどあり得ない。

そう、この竹林は本当に深く、深く広いのだ。

——その筈だ。

「ふう」

秒は暫し、疲れて地面に腰を下ろした。

夏であることを忘れるくらい、涼しいと感じる——と思った所、秒は異常に気づく。
霧が出ている。
確かに、朝靄が発生することは偶にある。だが今は昼も昼だ。空を見上げれば解る。竹の葉で日差しが遮られようとも、この靄に遮られようとも、その陽の光は解る。
——筈だ。
だが、此処は夏ではない。秒はそう感じる。
此処は——どこだ？
右手に持つ紐を確かめる。
ある。帰れる。

——やっと来てくれた。

どこからか、声が聞こえた。

——ずっと、貴方に会いたかった。いいえ、ずっと会っては居たけれど。

秒は、この声は竹だと直感した。
儚い、美しい声だった。

それは人間の声ではない。喉から出る音とは違う、崇高で透明な響きを持っている。
竹で作った楽器で奏る音のような。

――お願いがあるの。

その声を聞いた時、秒はふらりと眩暈がした。
その眩暈が収まると、その目の前には幻想的な白い花が咲き乱れていた。
花。
百数年に一度咲くと云う、竹の花。
「お前さん……！」

――そう。この命を貴方に預けたいの。

竹の花が咲くと云うことは、次の命に繋げる瞬間だと云うこと。
秒の愛した竹は、命尽きる寸前であると云うこと。
そして、その次の命を、秒に預けたいと云う。

――貴方、いつも私の事を思ってくれているから、きっとこの子も大事にしてくれるでしょう。

ぶわっ――っと激しい風が一つ、吹いた。秒は思わず目を瞑る。

――よろしくね。

足元で、オギャア、と声が聞こえる。
視線をやると、見事なまでの人間の赤ん坊がそこに居た。
どう云う事だろうか？　竹の、子供が人の姿をしているとは？
「これが、お前さんのお子で？」
秒は赤子を抱き上げて、空に問う。
だが、空は何も答えなかった。
赤子だけが、残った。
恐らく、もう竹は何も答えないだろうことを秒は感じる。何故かは解らない。

秒は赤子を抱いて、紐を伝って棲家まで戻った。一日中歩き通しだった気がするし、紐は大層長く引いてきたつもりだったのに、少し歩くだけで戻ってきた。
おしゃべりな舌は、心配するより先に「そのお子は？」と聞いてきた。
目が付いてないから解らないんじゃないのか、と云いたかったが、植物と云い争っても無意味だと考え直し

て、適当に返事をして家の中に入った。

赤子の名前は、笹から取って〝ささ〟と付けた。
唐蔵（からくら）ささ。
竹の子だけあって、ささはスクスクと育った。人間では考えられない早さで育つ。
見た目は人間にしか見えないが、ささは間違いなく竹の子であり、男でも女でもなかった。
薬草畑から見える竹は、もう枯れ果ててなくなっている。
その代わりに、この棲家には唐蔵ささが居る。
秒は、竹と同じくらい、ささを愛している。

また、夏がやってきた。
ささを預かった、あの日を思い出す。
美しい、靄のかかった竹の花。